Heroldo de HEL

N-ro33 nov.- dec., 1989

北海道エスペラント連盟
068 岩見沢市1条東6丁目 法然寺気付
ORGANO DE
HOKKAJDA ESPERANTO-LIGO:
Iwamizawa-si, Itizyô, higasi-ittyôme,
Hônenzi-kizuke, 068 Japanio

Nia Batalo kontraŭ "Lingva Rekrutado"

MIYAZAWA Naoto

Lingva imperiismo en Japanio

La japana registaro devigas la japanan lingvon al nacimalplimultanoj reale ekzistantaj en nia lando kaj al la fremdlandanoj naskiĝintaj en Japanio. La registaro tute ne agnoskas nacian kaj nacilingvan edukadon de aina nacio kaj korea nacio. Ekzemple, antaŭ du jaroj mia amiko de aina nacio estis haltigita de jugisto sian nacilingvan priparoladon en kortumo.

Devigo de la anglalingva edukado

La registaro devigas semajne tri-horan lecionon de la angla al japanaj lernantoj pli aĝaj ol 12 jara dum tri jaroj. Krome, la japanajn mezlernantojn oni subpremas sub severaj reguloj de lernejo. Multe da lernantoj malŝatas la lernadon pro ties trudemeco, kaj havas komplekson pri la fremdalingvo. Sed, por sukcese eniri en altan lernejon aŭ universitaton, la lernantoj devas sukcesi ekzamenon de la angla kune kun tiuj de matematiko, la japana lingvo k.t.p.

(daŭrigota al la 2a paĝo)

Pardonon!

Ĉi tiu numero fine aperis kun nekredeble eksterordinara prokrastiĝo. Certe, vi enmanigas ĉi tiun samtempe kun la januara-februara numero de 1990. Pro tio la redakcio plorpetas de vi, ĉiuj amikoj, grandanimecon.

La Redakcio de HEL

事務局、岩見沢へ

連盟事務局長が切替英雄氏から渡辺晋道氏に交替したことに伴い、北海道エスペラント連盟事務局の住所が変更されました（上記題字右参照）。電話番号は、0126−22−3091です。なお、郵便振替口座番号（小樽 0-17075 北海道エスペラント連盟）は変更ありません。

"Lingva Rekrutado"

Tiele la junuloj de Japanio vole nevole estas devigataj lerni la japanan lingvon por patra lingvo kaj la anglan por fremda lingvo. Aliflanke, la japanaj lernejoj tre similas al koncentrejo, en kiu la lernantoj malhavas eĉ homajn rajtojn. Mi rigardas la situacion kiel "Lingvan Rekrutadon", kies sistemo produktas en la junuloj konscion de diskriminacio al azia popolo kaj minuskomplekson al eŭropaj lingvoj, precipe al la angla.

"Internaciigo" de Japanio

Supre menciita fenomeno estas ne nur interna problemo de Japanio, sed ankaŭ malavantaĝo de japana popolo, dum la japana imperiismo faras ekonomian invadon al aziaj landoj. "Internaciigo", kiun la registaro intencas enkonduki en japanan publikon, havas esencon de imperiismo-naciismo, ekzemple laŭdi tenno'on kaj beligi la agresajn militojn iamajn.

De sklavo de lingvo al estro de lingvo

Ni, junuloj de Japanio, ne volas kunlabori kun tia "internaciismo" imperiisma, kiel sklavo de lingvo. Lingvo ne estu ilo por administrado aŭ devigado por popolo. Kaj ĝi ne estu kaŭzo de minuskomplekso, kiu haltigas liberajn esprimojn de individuoj.

Esperanto --- Lingvo Liberiga

Mi opinias, ke Esperanto estas sola lingvo, per kiu homoj povas liberigi sin mem. Ĝi ne estas akcesoraĵo por eleganta saluto, nek rimedo diskuti pri priesperanta movado. Ni devas posedi Esperanton, kiel lingvon liberigan.

Nia batalo kontraŭ "Lingva Rekrutado"

Antaŭ ĉio ni ŝanĝigu lingvan koncepton de la junuloj. Por detrui la obstinan sistemon de la administrado kaj devigado, ni kreu movadon en sfero de junuloj, per kiu ni klerigu nin mem. Por tio ni utiligu eĉ nunan sistemon de edukado kaj ĉiun lingvan medion en Japanio. Tiu movado estas unu el la bataloj por emancipi tutan esprimon disde la adnimistrado, la devigado kaj minuskomplekso. Ĝi estas ankaŭ batalo por kunigi movadojn de junularo tra la mondo, kiuj luktadas por libereco. Junulara movado de Esperantistoj kaj tiu kontraŭ tiaj administradoj kune marŝu antaŭen en la tuta mondo.

(Pri la enhavo respondecas la aŭtoro mem. La Red.)

Ges-roj Major 第53回大会に出席

札幌　木村喜壬治

1932年、第１回北海道エスペラント大会に出席したニュージーランドの Josef Major 夫妻が第53回北海道エスペラント大会出席を兼ねて札幌を訪れ、馬場恵美子さん、阿部映子さん、児玉広夫さんと木村が 9月29日 18:47、札幌駅に出迎える。そごうデパートの10階レストランで第１回大会の写真を見ながら往時を偲ぶ babilado の中で食事。この晩はクリスチャン・センター泊。

サルートン、ボンベーノンを言ひ交わし
　５７年ぶりの顔を見つめる
はろばろと訪ね来にけりマヨールさん
　いま浦島は妻の手をとり
Diras saluton, kvindek sep jaroj pasis,
　ankaŭ bonvenon,
　La vizaĵon rigardis, unu al la alia.
（小生の能力ではこんなところ。5,7,5,7,7
　と並べただけ）

9月30日 (sab.) 大会出席まで時間があるので渡辺康子さんと木村が akompanante promenadis ĉirkaŭon。道庁のponteto で anasoというと anseroと訂正してくれる。知らないエス語は日本語でいうとエス訳してくれる。彼は1932年の前後４年余り在日したので日本語は少しずつ思い出すが、字は忘れてしまったという。彼曰く、ザメンホフは日本語からも語根を作っていた。「こころ」を簡素化して「ころ」と発音すると解るように「こーろ=心」でしょう。この調子で５つ６つ並べていたが何という語であったか思い出せない。そして、 Ŝerco, Ŝerco 。大会でのあいさつは、２度も北海道大会に出席できてたいへんうれしい、と簡単なものであった。

夕べのbankedo ではGeedzoj がわが意を得たりとばかり、好みの料理を食べまわっていた。来日以来どの家庭でも出されたものには、すべてbongusta , bongustaと言って過ごして来たのであろうから、さぞかしと思われる。在札中に ne bongusta と云ったのは２度だけ、喫茶店で飲んだコーヒーに s-inoが。

10月 1日 (dim.) ＨＥＬの ĝenerala kunsido のあとで paroladeto をやり、閉会のあとは近所のteejo で９人の geamikoj と軽食をとり、児玉氏の車で定山渓へ。豊平峡見物と出かけたが乗入れ禁止、電気バスはあるがこれが終バスで帰りは徒歩とのこと。さようならして中山峠へ。好天にして眺望絶可、されど逆光とてカメラは羊蹄山を写さず。Vespere 身体を温泉に浸す。彼らは kutimiĝiしていないためか、われわれのように agrabla な気分になれないように見受けられた。

夕食しながら長談議。ＵＥＡの元会長ラペンナ、ホルムス氏は親しい友人であったこと、京都に在住のマックギル氏（２、３度来札）も彼の指導を受けたこと、戦争を逃れて現住地へ移ったのもエス語の仲介によること、などなど。彼らは時事問題について高い関心を持っている。来札して初めて英語新聞を手にしたとき、生気を取り戻したように感じられた。「英語新聞の中で毎日は劣っているという」。“Monunuo estas same al Usono, sed Nov-Zelanda dolaro estas duono de Usono.” Li tre bedaŭris tion.

10月 2日 (lun.) akompanantoj 義村政見氏と山口紀代美さん。ホテルまで山口さんのご主人も出迎えてくれた。晴天。まず藻岩山から札幌の全景を見る。見おろす街並はいずこも大気の関係か白っぽく霞んで見えた。初めてのことだった。大

倉山へ行く。雪のない国の人に実物の大きさは理解されたが、100 ㍍のジャンプは実感できないようであった。義村氏が経営のマンション“ESPER-DOMO”を見て中島公園へ。日本庭園などをひと巡りして、英文読売をもとめて、宿舎へ。きょうのĉiĉeronoの主役は山口さんにして頂いた。

10月 3日 (mar.) akompanantoj 江口音吉(ĉef.) 木村。札幌発 8:30 のバスで小樽へ。奥沢で江口さん一家が出迎える。ゴンドラで天狗山に登る。Major 氏が第1回大会に出席した頃は小樽が北海道経済の中心地であったことなどを説明しながら港街を見おろす。天気はよいが風が寒い。紅葉の色が珍しいと云うので写真を1枚、続いて水族館を回り、童心に返ってイルカ、アシカの曲芸を楽しみ札幌に戻る。きょうは江口氏が57年の経過を要約して、忘れた語は日本語で、これでも十分理解出来るのだから話ははずむ。録音してあるので聴いてもらいたい。

10月 4日 (mer.) akompanantoj 小林貴美子さん、坂本桂子さん、小熊 一氏とまず雪印乳業へ行って butero , fromaĵo の aŭtomata な製造工程を見せてもらう。同じ牧畜国のせいか興味深く注目していた。5人のために特別案内人がついてくれたので聴き逃すこともなく、日本語がある程度わかることもあって、むずかしい説明は通訳しないで pasis。S-ino には英語が堪能な坂本さんが英訳して喜ばれた。入口に牛の grupoのĉefoの首にさげる色々な鈴があったが、これをガーベルというらしい。ガーベル・チーズというのがあるがこの名をとったのかも知れない。

北海道開拓の村に案内して開拓の歴史を見てもらう。昼食では s-ro がスパゲッティを、 s-ino がヌードルを mendiして、それぞれ半分にして仲よく食べあっているなごやかな pozo 。原始の森、きれいな空気。そして千歳のサケ・マス捕獲場へ車をとばす。インディアン水車によるサケの捕獲風景を見守る。殊のほか興味があったようで、孵化の行程を聴きながらしばらく眺め回していた。こんな通訳はむずかしい、s-ino は坂本さんの英訳で喜々としてはしゃいでいた。Ges-roj Major は知識欲旺盛、種々造詣の深い人たちで、色々と教えられた。

夕べは 8時少し前の寝台列車で、小林、児玉、小熊、坂本、末永章子の皆さんと木村の見送られて上野に発った。

Major 氏からの礼状の一節

Nia monatlonga vizito al Japanio baldaŭ ŝajnos nur kiel bela revo. Sed unu el la plej elstaraj haltoj estos por ĉiam en nia memoro kaj ni dankas ĝin ĉefe al via grandanima organizo kaj helpo. Dankon por la bela fot-albumo. Ĝi helpos rememori la agrablajn incidentojn en Hokkajdo. Neeble estas skribi nun al ĉiuj amikoj. Mi petas vi trasdoni al ĉiuj niajn elkorajn salutojn kaj dankojn.....

小西岳著 文法の散歩道

いろいろな文法書を読んだけど、イマイチものにならない、というわたしとあなたにおすすめの1冊。著者の人柄どおり、やさしく、語りかけるように文法の「迷路」を道案内してくれます。

大阪、86年刊、新書版103p、700 円

最寄りの書店で「日本エスペラント学会発行」と指定してご注文ください。2週間ほどかかりますが、送料は無料です。

NI MARŜU ANTAŬEN AL VERDA ESTONTECO!

第53回北海道エスペラント大会（９／３０－１０／１　札幌）に５７名が参加

第53回北海道エスペラント大会は09月30日、10月01日の両日、札幌市北区の北海道大学国際学術交流会館を会場に開催され、全道、全国から57名が参加した（不在参加を含む）。参加者の中には57年前の第１回大会に参加した Josef Majorと夫人の Eva Majorの顔も見られエスペランチストの大会にふさわしい国際的な大会となった。

大会会場のある北海道大学正門には例年どおり木村喜壬治の手による大看板が据え付けられ，ひときわ人目をひいた。大会はまさに手づくりの大会。その看板を書いたのが木村なら、門柱に登って据え付けたのは切替英雄、会場のテーブル、椅子を並べて設営したのは星田淳、星田文子、影浦泰子、佐々木将人、横畠君枝たちだった。

第１日、13時受付け開始。受付けにあたったのは佐藤みはる、佐藤奈美子、佐々木将人。図書販売、苫小牧エス会作製の展示物、故相沢治雄所蔵の雑誌展示にも多くの参加者が見入っていた。

第１日

14時12分開会。定員40名の会場はほぼ満員となった。まず北海道エスペラント連盟会長・星田淳の開会のあいさつ（要旨は本誌前号の「われわれはエスペラントで何ができるか」）があり、つづいて Granda Babilado（大おしゃべり会）に移った。

発言者は切替英雄、宮沢直人、カワハラ・カズヤ、星田淳の４名。当初の予定と違って、発言内容の概要（日本語）が配布されなかったので、かみあわず、わかりにくいプログラムだったが、宮沢は札幌で活動を開始したＳＡＴグループと彼が主宰している、interesatoj のグループ“Esperantistoj Batalantaj”の活動を紹介、星田はブーローニュ宣言でいうエスペランチストの定義をとりあげ、エスペランチストとして何ができ、何をしなければならないかを提起した。

Granda babilado の最後に、木村喜壬治が Major 夫妻を紹介した。夫妻を代表して s-ro が、57年ぶりに北海道大会に参加していること、当時の思い出などを話したほか、日本文化への造詣の深さを示し、「ハンガリー語でも小泉八雲が読める、世界は八雲によって日本を知った」などと若々しい、わかりやすいエスペラントで語った。

J.Major のあいさつを受けて、新田為男、児玉広夫、木村が北海道連盟の歴史について話した。三人とも57年前の連盟創立当時からの先駆者・渡辺隆志（現在、厚真町在住）のエスペラント運動への貢献についてふれていたが、Major 夫妻の参加ともども、若い参加者には北海道でのエスペラント運動の歴史の重さを考えさせる契機となったことだろう。

休憩の後、今夏の世界エスペラント大会（イギリス・ブライトン）に参加した阿部映子、馬場恵美子からスライド写真付きで報告があった。ふたりとも世界大会の常連なので、聴く方も興味と羨望を交えながらの１時間であった。

第１日　Gaja Vespero

北大・クラーク会館内のレストラン・きゃら亭で17時30分から立食パーティー形式で。白いテーブル・クロスの上に並んだ料理、飲物を見た参加者から「会場間違ったんじゃない？」の声が出るほど「豪華」な夕食会になった。

s-ro Major の“Por sano de samideano !”の乾杯の音頭でスタートした。司会は例年のごとく佐々木将人で、ワイワイの２時間。切替ファミリーも加わって、札幌以外の参加者、新会員のあ

いさつ、クイズ（これは日本語をエスペラントに訳し、答えをまた訳してゆくという非常に厳しいもの）、木村、星田の歌あり、再会に話し込む者、酔って寝入る者、といつもどおりの交歓会になった。ここでも Major夫妻は人気のまとで、婦人たちをはじめ多くの参加者が夫妻をとりかこみ夫妻も気さくに会話に応じていた。

第2日　参加者自己紹介

ひき続き北大国際学術交流会館を会場に開催されたが、前日店じまいした図書販売コーナーを設営し直したり、テーブル・椅子を並べ直したりするのは早めに会場に来た参加者の仕事だった。大会役員とともに準備したのは、江口音吉、須藤昭三らのベテラーノ。頭がさがる。

10時06分、切替英雄の司会で全出席者が自己紹介することから始まった。約30名がそれぞれ着席順にエスペラント、または日本語を交えて自己紹介した。豊蔵正吾は、“Esperanto estas por mi tute malfacila”、といいながら tute en esperanto で、また山口紀代美は、ここに Majorさんがいるのはまるでタイム・マシンにのっているような思いだと述べて、満場の共感の拍手を受けた。

佐藤みはる、佐藤奈美子姉妹も esperantoで弟の憲が風邪をこじらせて参加できなかったことを報告。星田文子、山岸悦子、影浦泰子も流れるようなesperanto で参加者を魅了した。今大会の最年長出席者・江口音吉（80歳）は“parolanto の小樽”の面目躍如で小樽エス協会の軒昂ぶりを示した。

切替英雄は、11月 1日付で鳥取大学に転任しなければならないことを初めて公表し、参加者を驚かせた。カワハラ・カズヤは、切替の転任はたしかに北海道連盟にとって大きな損失であるが、われわれはどんな困難があろうとも前進しつづけよう、と切替の事務局長退任表明に応えた。

Major 夫妻からもあらためて自己紹介があり、木村喜壬治からも自宅に夫妻が宿泊した際のエピソード（アジの干物を朝食に供したこと）が紹介され、木村・Major のかけあいよろしく参加者を楽しませた。

第2日　連盟総会

参加者の自己紹介のあと、10時43分から北海道エスペラント連盟総会が始まった。星田淳会長が開会あいさつ、La Espero を斉唱したあと、大会議長に切替英雄を選任した。

連盟活動報告（本誌前号）、会計報告（要点）がエスペラント・日本語で切替事務局長からあったが、会計決算についてのみ事務的な事情で後日、会計監査の承認を受けることで了解してほしいと提案され（連盟会計監査・阿部映子の了承ずみ）、決算については会計監査委任を承認した。

続いて各地方会から活動報告があった。

札幌（児玉広夫）：　①昨年の日本大会は成功した。決算も終了し、実質的には黒字であった。今は遅れている大会報告書の発行を急いでいる。

②吉原正八郎会長が勇退して、児玉が会長、宮井康夫が事務局長の体制となっている。春の入門講座はのびのびだったが、10月から６名の受講生で秋の入門講座を開講する。講師は宮岸忠孝。

③９月に中国・瀋陽エス会と姉妹会提携の覚書きをとりかわした。ただ、今後、外国人との交流の場合、旅費、滞在費を全部肩がわりしてどんな交流が可能かが課題としてある。

苫小牧（星田淳）：　例会は月３回、公民館で初等講習の形で継続している。初等講習は新聞で募集しているが、春は申し込みなし、その後問い合わせがあって現在５人ほどが出席している。柴田真吾夫妻と infaneto も顔を見せにぎやかになった。中等クラスは時差例会になるだろう。公民

館まつりには参加しているが、これはずっと続けてゆく。外国からは中国の趙承華を迎えて歓迎会をもった。

室蘭（須藤昭三）：　現在会員は一人。入門講習はもっていないが、故・平田岩雄蔵書の整理を続けている。いずれ苫小牧の方にも協力をお願いしたい。

小樽（切替英雄）：　通信講座は北大などに約70部置いたが、反応は悪かった。続いた受講者でも４回で終わった。今は転居にそなえて故・山賀博士の雑誌、図書の整理をしなければならない。

（この件に関連して児玉広夫から、遺族から委託されていた故・相沢治雄蔵書の整理はすでに終わったとの報告があった）

協議事項については活発な討議がかわされた。

渡辺康子（札幌）：　５月連休の合宿というが主婦にとっては参加は無理。近いところだと日帰りで参加もできるが、別の企画を考えてほしい。この点を考慮してもらいたい。

児玉広夫（札幌）：　現在なんとか維持している機関誌の隔月刊と合宿に力をいれ、もし余力があったら他のことも考えたらいいのではないか。

星田淳（苫小牧）：　共同翻訳の提案は有志の中から出ている。“Ainaj　Jukaroj”のような具体的なものではないが、北海道を代表する作品などを翻訳できないか、出されてもいいのではないかという意見がある。機関誌上で具体的な提案があればよい。20年ほどの北海道観光案内は北海道の補助金も出て発行されたが、いろいろな条件の問題があってもやってみたいという人がいれば考えたい。

佐々木将人（函館）：　ＵＥＡの年鑑では、札幌には delegito に依頼すれば市内案内書を送ってもらえる印がついている。とりあえずB4版裏表のチラシ程度のものでもできないだろうか。

星田淳：　観光案内のときも最初の動機は佐々木のいうことだった。資料を見ていくうちに文だけでは面白くない、写真入りでなければ、ということになっていった。

金森美子（札幌）：　昨年ニュージーランドから来客があったとき、どこか市内を案内してほしいと頼まれたので、北大ポプラ並木などを紹介する案内書を買って訳してみた。 9月に趙さんが来たときもそのノートを使って案内した。高橋要一、木村喜壬治両先生にみてもらって、今は大通り公園、北大、時計台などの解説ができる。これは勉強にもなるので続けていきたい。

児玉広夫：　20年前の道からの助成金などを期待しては絶対にいけない。あのときは特別な条件があったし、今の連盟にはそんな力はない。少なくとも連盟の財政では出せない。昨年の日本大会の記念パンフ「札幌芸術の森」は、たまたま英語版印刷の時期と日本大会が重なり、しかも小淵修子の知人が芸術の森職員だったというタイミングに恵まれたから発行できた。共同で努力して翻訳したものを公共パンフに貼ったり、コピーしたりして外国人向けに備えるのなら、今の財政、力で可能だが。

カワハラ・カズヤ（札幌）：　ラ・モバードのバックナンバーを読んでいたら、北海道案内が連載されているのを見つけた。この場にいる人たちの中にも執筆者がいる。“Ainaj　Jukaroj”も最初は LEONTODO に発表され、のちに本になった。札幌の婦人グループがやっている翻訳の試みは大切なことで、そのつみ重ねが大きな仕事に実を結ぶ。そういう試みは機関誌に紹介したい。

連盟規約改正案の提案が役員会を代表してカワハラからあった。

改正の主要な理由は次の点にある。①現行の条だての表記（1,2,3 …）を第１条、第２条と規約

にふさわしく変更し、各条に「名称」「組織」など条文をわかりやすくする説明をつける。②第1条（名称）の連盟事務局の所在地を現状にあわせ、北海道内にする。③第4条（事業）で、エスペラント以外の諸文化団体との提携を明記し、エスペラント専門団体として道内の文化運動に積極的に関与してゆくことを位置づける。④役員の名称をあらためる。

以上の改正点は全体として、1974年改正規約にたちもどるものである。また、第8条（財政）の会費は大会前の役員会で検討した結果、据え置き（年額2000円のまま）とする。財政は現在けっしてゆたかではないが、会員増加と効率的運用で会員の負担を重くさせない。

規約改正案第8条（財政）にかんして、佐々木将人（函館）から「会計年度が歴年なら、いま新年度会費として納入されている会費は来年12月31日まで有効とすべきだ。三ヶ月おくれたからといって影響はないだろう」と意見がだされ、事務局から、そのように取り扱うとの答弁があり、全員一致で規約改正案を採択した。

なお、第5条（大会）にかんして、木村喜壬治（札幌）から文書で、北海道エスペラント大会のエスペラント名称を Kongreso de Esperantistoj en Hokkajdo から Hokkajda Kongreso de Esperanto とする提案があった。この提案は委員会に付託された。

次回、第54回北海道大会の開催を事前に招致する地方会はなかったが、切替大会議長が苫小牧からの出席者に大会招致をよびかけ、出席者が拍手で賛同の意を示すなか、星田文子が力づよく『やりましょう』と応え、大きな拍手をもって来年度北海道大会の苫小牧開催が決定した。苫小牧での大会開催は第42回（78年）いらい12年ぶり、札幌を離れての開催は第43回（79年）の小樽・朝里川いらいである。

連盟総会最後の議事、役員改選にあたって、前期役員会からの推薦者リストが切替事務局長から提案された。このリストはベテランの経験と知恵を活かし、若手のエネルギーが発揮され、各世代が協力共働できるよう、また連盟の広域性も考慮して提案されたものである。全員の拍手で推薦された役員全員が選任された。また、顧問4氏（いずれも留任）も紹介された。

新委員会を代表して星田淳委員長が閉会のあいさつ、La Tagiĝo 斉唱ののち、12時46分全議事を終了した。

（記録：カワハラ・カズヤ、馬場恵美子）

90年度　北海道エスペラント連盟委員会

委員長：　星田　淳　（苫小牧）
事務局長：　渡辺晋道　（岩見沢）
委　員：阿部映子　（札幌、会計委員兼務）
岩井正久　（函館）
カワハラ・カズヤ（札幌、編集部）
児玉広夫　（札幌）
須藤昭三　（室蘭）
濱田国貞　（足寄）
馬場恵美子（札幌、札樽地域担当、兼編集部）
横畠君枝　（常呂、北網地域担当）

北海道エスペラント連盟顧問

江口音吉（小樽）、木村喜壬治（札幌）
新田為男（由仁）、吉原正八郎（札幌）

第５３回北海道エスペラント大会参加者

【札幌】 阿部映子、伊藤直樹、大野美恵子、小熊 一、小淵修子、加賀谷勇、金森美子、カワハラ・カズヤ、木村喜壬治、児玉広夫、小林貴美子、坂本桂子、サトウエイジ、佐藤憲、佐藤奈美子、＊佐藤弘子、佐藤布美子、佐藤みはる、末永章子、鈴木壮太郎、瀬川綾子、豊蔵正吾、馬場恵美子、＊水上侑子、宮岸忠孝、宮沢直人、＊矢田真里子、山口紀代美、山岸悦子、義村政見、渡辺康子

【小樽】 江口音吉、切替英雄、切替宏彰、切替真智子、切替遼子、前田幸一

【苫小牧】 影浦泰子、星田淳、星田文子

【厚真】 渡部隆志

【岩見沢】 渡辺晋道

【常呂】 横畠君枝

【函館】 佐々木将人

【室蘭】 須藤昭三

【由仁】 新田為男

【道外】 ＊関東エスペラント連盟（東京）、＊菊島和子（東京）、＊小西岳（箕面）、＊小西ちよ（箕面）、＊斉藤ツメ（仙台）、＊高橋達治（市川）、＊竹内義一（高槻）、＊松本宙（仙台）、Josef MAJOR （ＮＬ）、Eva MAJOR （ＮＬ）、＊矢崎陽子（福島）

（＊印は不在参加。大会後の最終集計では、実参加45名、不在参加12名、計57名が参加した）

第53回北海道エスペラント大会に寄せられたメッセージは、ただ一通、関東エスペラント連盟からのものであった。感謝をこめて以下に全文を紹介する。 北海道エスペラント連盟

Mesaĝo de Esperanto-Ligo en regiono Kanto
Al la 53-a Kongreso de Esperantistoj en Hokkajdo

Prezidanto de ELK MIZUNO Yoshiaki

Karaj gesamideanoj kaj Estimataj Geamikoj de Esperanto!

Estas granda honoro kaj ĝojo por mi, ke mi havas ŝancon saluti al vi en la nomo de la Esperanto-Ligo en regiono Kanto, okaze de la 53-a Kongreso de Esperantistoj en Hokkajdo. Jam pasis unu jaron ekde la memorinda 75-a Kongreso de Japanaj Esperantistoj, kiu okazis en la ĉefurbo de via distrikto, Sapporo, kun rimarkinda sukceso. Kaj nun vi, batalantoj por paco kaj interpopola amikeco denove kolektiĝas sub la nova estraro, por marki ankoraŭ unu grandan paŝon antaŭen en la movado de via distrikto, kaj samtempe por montri valoran ekzemplon kaj doni instigon al la Esperantistoj en aliaj distriktoj tra la tuta lando.

Via Insulo Hokkajdo estas la lando de pioniroj, kaj do vi ankaŭ estas pioniroj precipe en kampo de interpopola komunikado surbaze de la Internacia Lingvo kiu celas al lingva egalrajteco por ĉiuj membroj de la homa familio.

Ni, Esperantistoj de la distrikto Kanto, tutkore simpatias kaj subtenas vin. Ni sincere deziras la sukceson de via Kongreso, kaj volas marŝi manon en mano kune kun vi, al la finfina venko de niaj komunaj aferoj.

Vivu la amikeco inter gesamideanoj nordaj kaj sudaj! Vivu la Kongreso!

北海道エスペラント連盟89年度会計報告

1989年10月08日

連盟会計委員（事務局長兼務）切替英雄

この会計報告は、北海道エスペラント連盟の88年08月01日から89年10月08日までの活動に伴う収入と支出を項目別にまとめたものです。

（編集部注：この報告は連盟総会の際、事務的な事情で報告、監査を後日に監査委員に託すことを承認されたものであり、監査委員・阿部映子の監査を経て、ここに掲載する。本文はエス日対訳であるが紙面の都合でエス文部分を割愛する。単位はすべて円）

収　入	986,704
繰越金	197,352
日本大会組織委員会より返済	297,000
連盟会費（88-89）	120,000
連盟会費（89-90）	68,000
連盟会費（過年度分）	15,000
機関誌購読料	16,000
寄　付	42,725
書籍販売	31,567
Ainaj Jukaroj 販売	9,600
合宿参加費	48,000
第53回北海道大会参加費	141,000
銀行利息	460

支　出	376,529
住所録作成費	14,010
コピー費（機関誌印刷を含む）	85,347
通信費（機関誌発送を含む）	88,396
封　筒	3,280
事務用品	20,239
アタッシュケース	1,500
役員会（場所代、旅費）	13,110
合宿経費	52,177
札幌エス会青年部後援	5,000
雑誌購読料（La Movado など3誌）	11,200
第53回大会会場費	4,590
第53回大会会食費	57,680
旅費補助	20,000

残　高	610,175

La Movado

ラ・モバードを読もう！

全国、全世界に読者をもつ、関西、東海、九州、中国四国の地方連盟共同機関誌。苫小牧分局発の北海道関連ニュースをはじめ、各地からの熱気あふれる運動記事が満載されている。

10月号には山本昭二郎「『初期の世界語』出版の頃」、11月号には北海道大会、札幌、苫小牧の活動が。

定評ある本の紹介、初等作文、日エス対訳の土居智江子の連載「共に生きるために」、辰巳博、田平正子出題のクイズなど、まさに面白くてためになる雑誌。

日本エスペラント界の良心、

輝く星、ラ・モバードを読もう！

月刊　年間購読料3200円.

申し込みは下記へ

振替　大阪　6－60436

ラ・モバード社

（この広告は Heroldo de HEL 編集部が勝手に掲載したものです）

読書ノートから

須藤　昭三

“Abismoj”　　Jean Forge　著
（フィンランド、73年刊。150p、 600円）

“あなたのペンがあとで描写できる何かを、あなたは見たいを思っています。私がその望みをかなえてあげましょう。いままで他の誰も見なかったものが見られるのです。人間の心の深い深い奥底をです。そこは人間の目には永遠の暗闇です。誰も計ることの出来ないその深みのなかで起っていることが見られるのです。あなたの耳に、その深みでこっそりとさまよっている内緒の思いが聞こえるのです。そのおし黙った思いがあなたの耳に高くなり、話となるのです。人間の心の深みへあなたは降りてゆき、現実に体験し、深みの底まで探求し、あとで人間たちに話すことが出来るのです”

これはインドの修道者が作家に語りかける一部分である。その著作がもう時代遅れで売れなくなった作家が、空腹と寒さから、あるだけの金をポケットに入れ自分の部屋から飛び出し、暖気をもとめて街のとあるクラブへ入ったとき催されたインド修道者による呼び物のショーであった。

薄暗くされた舞台でインド修道者の手の上で回転し、複雑な色と光に変化するガラス玉なのか水晶の玉なのか、そのなかに現れる不思議な世界が観客を魅了する。作家はその不思議な力に誘われて、舞台裏にこのインド修道者を訪ね、自分の苦境を切り抜けようとする。快く引き受けたインド修道者はこの作家に例の玉を見せながら abismo の世界へ誘う。それがこの本の内容である。

登場人物の会話はなく、心のなかの語りがこの物語の世界である。主な登場人物は四人、エルネスト＝地主、ハリノ＝隣り村の地主の娘、マテオ＝画家、ゾーニョ＝画家の許嫁。

地主エルネストは父親が生きている間にその経営の勉強を怠り、酒と女にその財産を使い尽し、土地、家屋、家畜も抵当に入っている。そこで目つけたのが隣り村のハリノ（彼女は男がほしくてたまらない娘）。マテオに父親はなく、小さいころ母親も亡くし、母親の友人であるゾーニョの母親（未亡人）に家族同様育てられた。長年の修業のあと、母娘の待ち望む家へ帰る途中、下車駅を寝過ごしてしまったマテオは、たまたまハリノ（マテオに一目ぼれ）を連れて乗り合せていた彼女の父親のすすめで同家に一泊し、絵を描くための再来を約し、翌早朝の列車でもどる。それを知らないハリノがエルネストに愛を誓うのだが――。

一方、ゾーニョは帰宅してもすぐ何処かへ旅に出るマテオに不信の念を抱く。ハリノはエルネストとの愛の誓いを早まった、と思いつつも平然とマテオ攻略にかかる（実はマテオもハリノの誘惑にフラフラしている）。突然現れた画家と親しくしているハリノの様子を見たエルネストは、嫉妬と疑惑と絶望のあまり部屋で酒を飲み、放火のうえピストル自殺してしまう。マテオは蜘の巣のようなハリノの誘惑から必死に逃げ出そうと、訪ねたその家を飛び出し、夜の道をさまよう。

（室蘭エスペラント会）

札幌エス会の入門講座

札幌　宮岸忠孝

春の入門講座は休講だったが、秋季は10月始めから毎週土曜日（午後１時半から２時間）、北区の北海道クリスチャンセンターを会場に４ヶ月の予定で開講している。

受講者は男２名、女６名の計８名で、年齢では34歳から61歳まで、８名のうち４名は再入門者である。今回の受講者に受講の動機を聞いたところ、「エスペラントに関心があった」が３名、「未知のことを学びたい」が３名、「老化防止のために頭脳訓練」が２名（60代の人）であった。

テキストは今回から「エクスプレス・エスペラント語」（安達信明著、白水社発行、 1,600円）を使用している。このテキストの各課（全20課）は会話、単語、邦訳、解説で構成され、解説では文法に重点がおかれ、また、練習問題も偶数の課にあって自宅学習に便利である。

現在は会話の暗記を重点にして、毎週二課分を会話的に学習している。

各地方会、専門団体、個人からの活動報告をお待ちしています。エスペラント文の場合、手書きで結構ですが、間違いのないよう明瞭な字体でお書きください。Antaŭdankon ！　（編集部）

連盟会費のご案内

エスペランチスト、学習者はどなたでも直接、北海道連盟に入会できます。

会費（本誌購読料を含む）は年額2000円で、新年度分払込みは90年12月31日まで有効です。入会ではなく本誌購読だけを希望される方は購読料と明記のこと。

送金は右の振替口座・北海道Ｅ連盟へ

SALATO

★ＥＳＰＥＲＡＮＴＯ　T-ĉemizo

南半球はＴシャツの季節だ！

いま、ブラジル、オーストラリア、ニュージーランドのお友だちにプレゼントするととっても喜ばれます。

白地にあざやかな緑で★ESPERANTO

阿部商会特製、売切間近、早者勝！

１枚〒込 1750 円、ＳＭＬ指定で

振替　小樽 8-6864 阿部映子　まで

☆苫小牧民報89年09月29日付に星田淳「日本の印象は近代的／中国のエスペランチストを迎えて」。９月に来道したシェンヤンの趙承華のこと。

☆北海道新聞89年10月27日付夕刊に「エスペランチストの拠点に／西独アーレンの“町おこし”」。人口 63,000 のアーレンが１万冊のエスペラントコレクションを購入し、将来は世界のエスペランチストのメッカになることを夢見ている、と。

☆北海道新聞89年11月21日付夕刊に日本エスペラント学会理事長の山崎静光の「『運動』から『文化』に発展したエスペラント／学会創立70年」。

（本欄の協力者は札幌の豊蔵正吾さん）

★Heroldo de HEL

n-ro 33 （1989, nov. − dec. ）

北海道エスペラント連盟機関誌　隔月刊

編集部：　004 札幌市厚別区もみじ台東 1-1-6-304 カワハラ気付

事務局：　068 岩見沢市１条東６丁目 法然寺気付

郵便振替口座：　小樽　０−１７０７５